



日本イスパニヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第27号 (2020年10月1日) / Núm. 27 (1 de octubre de 2020)

日本イスパニヤ学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨 1-24-1-4F
株式会社ガリレオ 学会業務情報化センター内
Tel: 03-5981-9824 Fax: 03-5981-9852
e-mail: g004esp-mng@ml.gakkai.ne.jp
(<http://www.gakkai.ne.jp/ajh/>)

広報委員会「会報」編集部

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学産業社会学部
仲井邦佳 宛
Tel: 075-466-3148
e-mail: knakai@ss.ritsume.ac.jp

目 次

【巻 頭 言】

木村琢也 イスパニヤ学会コンコロナ…………… 3

【追 悼】

土屋 亮 西川喬先生の思い出…………… 4

【エッセイ】

1. 青木文夫 恩師の方々に思いを馳せる…………… 5
2. 加藤伸吾 スペイン留学記…………… 7
3. 小川雅美 コロナ禍と遠隔授業…………… 10

【書 評】

1. 福嶋教隆 三好準之助『南北アメリカ・スペイン語辞典』
(大学書林、2020年)…………… 11
2. 岡本淳子 バレリア・ルイセリ『俺の歯の話』
(松本健二訳、白水社、2019年)…………… 12
3. 高澤美由紀 泉水浩隆『Un estudio fonético experimental sobre la percepción
de la entonación de oraciones declarativas e interrogativas
del español por hablantes nativos y estudiantes japoneses
スペイン語母語話者と日本人スペイン語学習者の平叙文・
疑問文イントネーションの知覚に関する実験音声学的研究』
(三修社、2020年)…………… 14
4. 小阪知弘 田尻陽一編『21世紀のスペイン演劇1』
(田尻陽一・岡本淳子・矢野明紘訳、水声社、2019年)…………… 15
5. 松田侑子 田林洋一『『ドン・キホーテ』に潜む狂気
—正気を失ってしまったのは誰か』(水声社、2020年)…………… 17

【著書紹介】

- 森 直香 『フェデリコ・ガルシア・ロルカと日本』
(晃洋書房、2020年) 18

【新刊書紹介】

- 北條ゆかり 松久玲子編著『国境を越えるラテンアメリカの女性たち
—ジェンダーの視点から見た国際労働移動の諸相—』
(晃洋書房、2019年) 19

【学会報告】

1. 福寫教隆 スペイン語学士院連盟第16回大会
(XVI Congreso de la Asociación de Academias de la Lengua Española)
(2019年11月4～8日、於セビリア) 21
2. 安田圭史 京都セルバンテス懇話会第21回全国大会
(2019年7月20日、於静岡県立大学) 23

【新刊案内】(2019年6月～2020年5月) 24

【『HISPÁNICA』編集委員会より】 28

【編集後記】 28

【巻頭言】

イスパニヤ学会コンコロナ

木村 琢也

本会の会員であればすぐにおわかりになるように、タイトルの「コンコロナ」は東京都知事お気に入りの「ウィズコロナ」なる疑似英語（最初に言ったのは落合陽一氏らしいですが）をもじったものです。スペイン語として通用しないのは「ウィズコロナ」が英語として通用しないのと同じことですが、語呂の良さではこちらのほうが優れている気がします。不真面目だ、不謹慎だというご批判はもっともです。しかし、そもそも「ウィズコロナ」すなわち新型コロナウイルスと共生しながらの「新しい日常」なる考え方自体が不真面目に思えてなりません。私たち人文科学の学徒も看過できない専門知の軽視が、この不当に軽い響きの言葉から透けて見えるのです。

対処法のわからない新しい感染症が発生したら、何を措いても医学、細菌学の専門知を動員し、一時的に経済活動をストップさせてもまずは感染症を封じ込めることに全力を尽くすべきでしょう。それを、私たちの国は最初は中国に気を遣って中国からの入国制限をためらい、その後はオリンピックにこだわって緊急事態宣言を遅らせました。この原稿を書いている2020年8月中旬、新たに「ウィズコロナ五輪」を検討する会議の計画があることを報道で知りました。かつて戦局を見誤ったために国内外に取り返しのでない災禍をもたらしたことを国を挙げて反省するこの季節に、何ということを考えるのでしょうか。「ウィズコロナ五輪」など開催できません。予言しておきます。きっと当たると思います。

今回のコロナ禍は、私たちが直視したくなかったこと、できれば知らずに済ませたいと思っていたことを、否応なく私たちの目の前に突きつけているように思います。それは、私たちの税金で運営されている政府や自治体の想定外の頼りなさであったり、普段は「きずなきずな」と言っている日本国民の抜きがたい差別意識であったりするわけですが、私は上にも書いた専門知の軽視、そして年々加速する言葉の空疎化も挙げたいと思います。その筆頭は、そう、今あなたが考えたあの人の言葉の空疎さですが、それだけにとどまりません。語りだすと長くなって字数制限をオーバーするので、ここでは「敵基地攻撃能力」を「相手領域内でも弾道ミサイル等を阻止する能力」と言い替えて違憲を合憲にする策動がこのコロナ騒ぎにまぎれて進行中であることだけを挙げ、同じ人文学徒である会員各位と危機感を共有することとどめておきます。

さて、このような異常な時期に日本イスパニヤ学会の会長を拝命いたしました。66年に及ぶ学会の歴史の中で突出して浅学非才の会長であることを自覚しています。自分が適任であるとは全く思いませんが、理事の先生方の投票の結果でもありますので、長くお世話になっているこの学会への恩返しも兼ねて、2年の任期の間、学会の活動が滞ることのないよう誠実に職務を務めてまいりたいと思っております。

このコロナ禍はまた、人々が物理的に移動して集まらなくてもインターネットの利用によってかなりのことができるということに気づかせてくれました。今年度の大会はZoomを用いたオンライン開催となります。思えば昨年度の大会は台風のため予定されていた日に開催できず、日移しての特別大会となりました。はからずも2年連続で人知を超えた要因により開催形態の変更を余儀なくされたわけですが、技術の進歩のおかげで今年度も大会を休まずに開催することができます。すでに今年度は2回、理事会をZoomで開きました。10年前な

らこうは行かなかったでしょう。大会の開催は機関誌『イスパニカ』の刊行と並んでこの学会の 2 本の柱のひとつです。集える形で集い、日頃の研究成果を交換する営みを、私たちは続けて行かなければなりません。

人文科学は「役に立たない学問」のように言われがちですが、そのような空気が現下の言葉の空疎化を許していると思います。言葉の力を信じ、言葉の空疎化に抗うことは、人文科学徒である私たちの責務です。このコンコロナの時代にあっても。

(きむら・たくや 清泉女子大学教授、日本イスパニヤ学会会長)

【追 悼】

西川喬先生の思い出

土屋 亮

恩師の訃報に接し、急遽、東京から神戸に向かう新幹線のなかで、いくつかの思い出が脳裏に浮かんできた。

学部 4 年生の秋、私が「大学院に進むつもりです」と伝えると、先生は「われわれは遊んでいるように見えるかもしれないけれど、大学教員は大変ですよ」とポツリと感想を洩らされた。当時の私は世間知らずもいいところだったが、先生方が遊んでおられるなどとはむろん思っていなかった。じつは、そもそも、大学教員になることをはっきりと意識していたわけではなかったのである。きっと私が、好きな学問を仕事に選ばれた、先生の愉しそうな様子を目にして、甘い夢をふくらませている、と危惧された上での言葉だったにちがいない。

また、博士課程の 1 年次には、私が書いた論文について「こんなことは誰にでも書けますよ」と手厳しい批判を浴びせられた。この道に進んだ者なら誰しも似たような経験をするものかもしれないが、論文を書くときは、いまでもあのときの先生の口調がよみがえってくる。そのような回想にふけていたせいか、車窓越しに流れる風景にはぼんやりと霞がかかり、輪郭がなかった。

西川先生は道東の釧路のお生まれで、神戸市外国語大学イスパニア学科の第 4 期生である。その頃、学舎はまだ六甲山のふもとにあった。仄聞するところでは、のちに hispanista として活躍される先生のいしづえは、語学の高橋正武先生、そして文学の鼓直先生から受けられた学恩によって築かれているという。

私は高橋先生の訶咳に接する機会はなかったけれど、白水社の『西和辞典』と『スペイン広文典』を書かれたときの、お人柄を偲ばせるような、悲喜こもごもの逸話を聞いたり、ありがたいことに西川先生を介して蔵書の一部をゆずり受けたりしている。もともと文学青年だった西川先生が、語学の道を志されたのは、高橋正武先生の薫陶よろしきを得てのことだったとお聞きしている。

一方、西川先生の鼓直先生にたいする敬慕の念には、深甚なるものがあつた。それは、私が大学院生の頃に、西川先生が鼓直先生やほかの先生方、そして私を御自宅での食事に招かれたときや、のちに何度かご一緒のところを見聞したとき、まざまざと感じられた。したがって、私の目には、西川先生は、昨年 4 月にご逝去された鼓先生のあとを追って、そのすぐ後に旅立たれたように思えてならない。

西川先生のご専門は、学部の卒業論文こそ接続法がテーマだったが、それ以後はもっぱら時制の研究および時制の研究史をたどることであった。けれども、折にふれて凝り性の面がちりほり顔をのぞかせて、ほほえましかった。私生活では、柔道や水泳しかり、カラオケしかり、禁煙騒ぎしかりである。研究もその延長線上にあって、1990年代後半からは、時制の体系のほか、冠詞の用法の研究に入れあげられた。私がゼミに入った頃は、毎年、必ず誰かが卒業論文のテーマに冠詞を選ぶよう指導された。かくいう私もそのひとりである。おかげさまで、それが現在まで取り組み続ける研究テーマになっている。

不肖の弟子が言うのも僭越な話だが、西川先生は学会ではさほど目立つ存在ではなかったと思っていた。そんなわけで、かつて学会や研究会の誌上で、東京外国語大学の原誠先生とser 受動態をめぐる激しい論争をくりひろげられたことを、のちに知るに及んで、我が身の不明を恥じたものである。

スペイン語学がご専門の先生方に言わせると、「西川喬氏と言え、まず時制の研究でしょう」ということになるけれど、ほかの先生方には「教科書をたくさんお書きになっている方ですね」となるにちがいない。「わたしは、専門よりも教科書の方で有名なんだよ」と、いつか先生が自虐的に洩らされたことを憶えている。けれども、初級の教科書以外に、私の座右の書『わかるスペイン語文法』（同学社）という好著があることを指摘しておきたい。

教科書のなかでは、10年以上の歳月をかけて準備されたデビュー作『スペイン語ゼミナール』（現『新スペイン語ゼミナール』第三書房）に、格別の愛着を抱いていられた。各課に新しく学習する文法項目を配分し、それらを使った短いダイアログ、そして練習問題（＋コラム）という体裁はそう珍しくはないが、1990年代後半以降、A4判のポップな表紙に、安定感のある文法シラバスという内容のスタイルが定着したのは、西川先生のご功績ではないだろうか。先生の教科書があちこちで愛用され、学ぶ人びとのスペイン語の基礎作りの役を果たしていることは、弟子として本当に誇りに思う。先生はご研究の分野においても、スペイン語教育においても多大な貢献をされた。

回想とともに私を乗せた新幹線は六甲トンネルを抜けて、新神戸駅に着く。とうとう先生と永遠のお別れをしなければならない。ついに不肖の弟子は「不肖」を返上する時機を逸してしまった。めざすべき目標を失い、途方に暮れている。先生のご命日は、令和元年8月4日。享年73歳。西川喬先生、どうか安らかに眠りください。ご冥福をお祈りいたします。

（つちや・りょう 亜細亜大学講師）

【エッセイ 1】

恩師の方々に思いを馳せる

青木 文夫

上智大学の大学院言語学専攻は、英語・フランス語・ドイツ語・ポルトガル語・ロシア語にスペイン語（上智ではイスパニア語）専攻の学生の混合チームで、博士前期課程は総計15名前後、後期課程は5名程度の陣容であったが、スペイン語を専攻する筆者も運良く博士前期課程に進学を許され（1976年）、当時流行りの生成文法にのめり込むことになった。学部の3年くらいから言語学全般の科目を履修していたのだが、生成文法については輪郭的なこと程度しか分からず、専門とする指導者もいなかったことから、博士前期課程になって初めてSS

やアスペクトを読み、いきなり梶田優先生（当時は東京学芸大）の名著『文法論II』（大修館書店、太田朗編著）の変形生成文法の章を読むという荒技から始めたおかげで、本業（？）のスペイン語のほうは相当疎かになり、西語文法論の担当であるフェリス・ロボ先生や西語文体論のアヌンシアタ・エレサ先生からはちっともスペイン語が上達しない学生だと睨まれていたはずである。当時、僕が大学院に進学すると同時に筑波大移転を間近にした東京教育大から転出された太田朗先生の教えに加え、非常勤で来られていた中右実先生、池上嘉彦先生など錚々たるメンバーもいて、非常に恵まれた環境で学ぶことができたのである。おかげで1960年代から70年代の主要な著書・論文に触れることができ、生成文法の流れを僕なりにしっかりとつかむことができた。

しかしながら、スペイン語を疎かにしていたおかげで、修士論文を書くのに1年余分に費やし、博士後期課程の学科目入試後の面接では前日のスペイン語の出来が悪いことを注意され、おまけに若干苦手の日本語学（入試は言語学全般で日本語学や音韻論・音声学も含まれ、それに西語学とスペイン語に英語）の金田一春彦先生からは「あんな問題（八丈島方言の音韻に関するものだったと思う）も解けないのか」と辛辣な言葉を浴びせられ、これは落ちたかと思ったが、何とか理論言語学と西語学関連の問題（これは受験生に合わせてくれた）で帳尻を合わせられたのか、無事に博士後期課程に進学することができたのであるが、当時は志願者が12名くらいはいて、半数は不合格になるという入試だったので、よく合格したなと内心ほっとしたのであった。

とにかく恩師に恵まれた人生だった（まだ過去形じゃないが）と思う。その中でも、自分にとって最も思い出に残るのが、博士後期課程在学中に太田先生が筆頭研究者となっていた科研グループの研究報告を理論言語学専攻の院生に分担させて出版するというもので、大修館書店から「海外言語学情報」という題名で刊行され、筆者はその4号までに計6編の解説を掲載させてもらうことができた。とにかく、多くの研究者の目に触れるので、おかしなことは書けないと、ワープロもない時代、必死になって手書きで論をまとめたのを覚えている。とくに第2号に掲載していただいた「語彙関数文法」は当時Joan Bresnanを中心とするLexical Functional Grammarの研究動向のまとめであったが、functionalを機能と訳すことに抵抗があり、主要部の語彙が変数（項）をとる関数のようなものなので、関数と訳してもよいのではと太田先生に提案して、認めてもらえたが、結局この訳は一般に受け入れられないまま終わった。その後「海外言語学情報」は上智大学言語情報研究所（通称SOLIFIC）によって、太田先生の後任の梶田先生、加藤泰彦先生などの編集により第10号まで続いたことを申し添えておく。

その後、そういった研究歴が認められ、博士後期課程満期退学、東京での非常勤講師だけの生活を経て（とくに青山学院大学の北村光世先生にはお世話になった）、昭和61年に長崎県立大学専任講師の職を得て（このときは神吉敬三先生の紹介であったが、専攻が全く無関係な学生にも気配りをしてくれて、本当に驚いた）、平成元年に福岡大学の准教授で転任して、今に至っているのは望外の幸せな人生であると思う。

最後に一つ思い出を。平成元年、福岡大学に転任してすぐ、当地の福岡言語学研究会（現福岡言語学会）の例会に初めて参加した際に、「スペイン語学の青木です」との自己紹介のあと、九州工業大学の村田忠男先生や九州大学の稲田俊明先生他に「言語学情報の青木君ですか」と尋ねられて、「あの解説を読んでもらっているんだ」と嬉しく思うのと同時に、これからもあの頃には負けないような研究を続けていかなければいけないなど、身の引き締まる思いを

持ったのであった。

ロボ先生、エレサ先生、太田先生、他の多くの恩師の方々がいかにダメな教え子に寛容で、また研究発表の場を提供することに熱心だったかと、つい思いを馳せる僕も年をとったかな。あっ！思い出した、恐怖のゼロ時限（始業が9時15分なのに8時半から1時間目を始める）を学部時代受講したことがある小林一宏先生のお名前もあげておかないと。青木君、よく大学教授になれたねと思っているはずだけど、これからもずっとお元気でお暮し下さい。

（あおき・ふみお 福岡大学教授）

【エッセイ 2】

スペイン留学記

加藤 伸吾

2019年3月末から2年間、勤務先から留学させてもらう機会を得た。本稿執筆現在まだ留学中であるが、この際こまめに気づいたことや印象など記しておきたい。なお、以下の記述は2020年8月の夏期休暇前の情報に基づいている。

実は2018年11月に心臓弁膜症の大きな手術をした。その4ヶ月後に出発で、歩行など生活のリハビリをしながらビザ取得の手続きなどをしなければならなかった。なかなか不安だったが、手続きについて在東京スペイン大使館の受付窓口の方は迅速かつ効率的な対応で、幸運にも体力を削られずに済んだ。噂話も総合すると、この窓口の受付にどういう人がいるかでだいぶ、快適さというかストレスというか、減ったり増えたりするようなので、「幸運」としか言いようがない。窓口の方はじめ領事部の皆さんに感謝したい。

海外旅行長期保険はスパニッシュ・コミュニケーションズ社に依頼した。心配になるくらいにの価格でやってくれて感謝の念に堪えない。他方、これは私が迂闊というかもはや阿呆としか言いようがなかったが、ここで既往症がカバーされる保険かどうかをちゃんと確認しなかった。このためにする苦労については後述する。

医療保険について、やはり海外旅行保険が第一選択肢だろうが、長期留学の皆さんには、同国内務省や国家警察が管轄の外国人登録と外国人 ID カード（Tarjeta de Identidad de Extranjero, TIE）取得後、そこで安心せず市が管轄する別の手続きである住民登録（empadronamiento）と医療カード（Tarjeta Sanitaria）の取得に可及的速やかに進まれることも、強くお勧めしたい。入手後の公的医療機関における医療サービスが全て無料となる（sanidad pública）。心臓移植のような高度医療すら無料で受けられる。外国人もちろんこの恩恵に与ることが可能であるが、それは中央政権が緊縮財政に舵を切ると真っ先に削られるので、日頃からニュースには注意したい。

また、この一連の手続には非常に時間がかかっておかしくない。市中金融機関の医療保険（価格比較サイト rastreator.es で業者を選べる）に入っておくと良い。2年の留学の場合、ビザ更新が必要になる。私はこの更新作業に弁護士事務所を使ってしまった。全くいいご身分である。200€程度だが、更新にはこの民間の医療保険が必要と言われた（TIE取得には不要）。TIEに加え、Tarjeta Sanitaria と民間医療保険二つ持っておけば苦労することはまずなかろうかと思う。なお、私が留学しているマドリー州は、平均して sanidad públicaの方が privada より質が高いが、カタルーニャ州ではこれが逆転すると聞いた。総じて医療サービスの質に不安

を抱く必要はないと思う。

そんなこんなで留学が始まり数ヶ月経ったところで、実は先述の弁膜症手術の後遺症である不整脈（心房粗動）に悩まされた。何度か一時帰国をして日本で心臓カテーテル手術を受けた（横須賀共済病院が素晴らしい）が、再度マドリーに戻り研究活動を続けた。

9月にはコンプルテンセで身元を引き受けてくれたフロレンティーノ・ロダオ氏や神戸大学の蓑原俊洋氏の講演会「令和時代：新しい日本」の末席に加えてもらった。私は日本とスペインの民主化比較というテーマで話した。11月には学会報告もできた。さすが本国だけあってスペイン民主化（*transición española*）だけを扱う学会があり、アルメリーア大学の現代史スタッフが中心となっている。大会はもう7回を数える。学会の成果はお馴染みの Dialnet（dialnet.unirioja.es）からもリンクが張られ、民主化研究の最前線の一端に触れることができる。便利だが大変な時代である。

2020年になり、さあ博論（お恥ずかしながら当方博士号がない）と思ったところで、実は1月また倒れてしまった。肺血栓塞栓症といえばおどろおどろしいが、要はエコノミークラス症候群である。後厄翌年の大手術明けなのに、気負って博論の作業を頑張りすぎたのかもしれない。とはいえ、前年の手術後、抗血栓薬ワルファリンは医師の指示で中止となっていたが、これも良くなかったらしい。欧州では弁膜症手術後、いかなる場合でも一生抗血栓薬を飲み続ける（ワルファリンではなくシントロームが第一選択）。日本はそうではない。これはそれぞれの関連学会が、世界の研究動向に基づいて作成したガイドラインの示すところで、私のような素人はなんともいえない。先に述べた海外旅行保険会社も、これが「既往」か「新規疾患」か微妙なケースで困っているらしく、まだ判断が下りていない。しかしいずれにせよ *Tarjeta Sanitaria* が民間の医療保険を持っていれば回避できたことで、強くお勧めする所以である。

手術入院に1ヶ月。退院する2月末には、新型コロナウイルス COVID-19 に伴う混乱が地球を覆い始めていた。当初有力マスコミがこぞって「流行性感冒の一種」などと、当時としては専門家も少なからず共有していた認識だったので仕方なかっただろうが、結果的に間違った認識を広めたことで、欧州各国では政府の初動が遅れた。今ではそれがパンデミック化主因の1つとして指摘されている。正しい気もするが、結論はさらなる研究を待った方がいいだろう。数十年後の現代史家や国際政治史家の仕事かもしれない。

心肺の手術をしたばかりの私は高リスク群の一員で、感染即白木の箱（今日日はジュラルミン？）、と覚悟し家に引きこもった。どうせ積み上げたものを棍棒フルスイングでブチ壊されるのなら、賽の河原で鬼にやられるより生きて博論指導教員にやられる方がマシである。ましてや私の今の指導教員である自治大学の *Álvaro Soto Carmona* は博士20名を育て就職させた、鬼どころか地藏菩薩の如き名伯楽である。ちなみに前の指導教員、UNED の *Santos Juliá* も穏やかな普賢菩薩のような人だったが、先日帰天された。幸か不幸か *capilla ardiente* に参列できたが、あたたかな雰囲気の中皆が泣き笑いで立ち話する、とてもスペインらしいものだった。何せ急な知らせで、ファストファッション店で急いで喪服を買ったが、着ているのは私だけだった。ご冥福を心よりお祈りしたい。

新型コロナ危機に伴う *Estado de alarma*（「警戒事態」程度が適訳か。「非常事態宣言」は *Estado de emergencia* の訳で今回については誤訳であろう）と実質的外出制限下のスペインは、全土がまるでアレハンドロ・アメナーバルの映画 *Abre los ojos* の1シーン、全く人も車もない *Gran Vía* と化したかのようであった。

しかしそんな中でもスペイン人の「強さ」を感じられることがあった。毎晩 9 時の *aplausos sanitario* である。危機対応の最前線に立つ医療従事者へ、外出制限下でも連帯と感謝の意を表すため、多くの人々がバルコニーから数分間拍手と口笛を贈った。この 2 語で YouTube 検索すればその様子を見ることができる。およそ 2 ヶ月間続き、収束が見え始めた 5 月 17 日までそれは続いた。イタリアやフランスではもっと前に自然消滅したところが多いらしい。

この *aplausos sanitario* に示された「連帯」こそ、今の日本には決定的に欠けており、不肖筆者が僭越ながらスペイン民主化推進の原動力の一つになったものとして研究テーマにしているものであった。新型コロナ危機にスペインで見舞われ、歴史家として必須のアーカイブワークはおろか外出すらろくすっぽ出来ない中、この「連帯」を肌で感じる事ができたのが、実は今回の留学最大の「収穫」だったのかもしれない。ちなみに、*Estado de alarma* は 6 月 15 日解除。国立各文書館も順次再開しているものの、行政・司法調査優先、同時入館人数も限定され、一般の研究者はいつ利用できるようになるか分からない。

なお「連帯」といえば、新型コロナ危機最初期の 3 月 8 日国際女性デーにはスペイン全土で大規模なデモがあった。これがいわゆる「密 (*aglomeración*)」にあたり、その後のパンデミックを招く主因となったとの説があり、訴訟まで起きている。しかしこれも「連帯」を示すエピソードでこそあれ、主因とはいえない。同日にリーガ・エスパニョーラも開催されていれば、その言われ無き非難の主体である極右政党 VOX に至っては、数万人規模の党大会まで行っていたからである。牽強付会もいいところである。

本稿執筆時点で *Estado de alarma* 解除は続いているが、英仏葡など隣国では大きな集団感染が再発している。スペインも規模こそ小さいが例外ではない。油断はできないが、スペインではまだその規模が小さいのは、それでもマスク着用や手洗いなどが徹底しているからであろう。意外な気もするが、これは「秩序志向」というより、「用心深さ」や「他者にとって良かれと思ってやると決めたことは徹底的にやる」(カトリック的?) という信条を持つ人の数の差であるようにも思える。

7 月以降は日本からもスペインに行けるようになってはいるはずであるが、お越しの際はぜひマスクと手洗いうがいを励行、空港売店でアルコールジェルを買い求めて常時携帯していただきたい。小生も無事に、博論を粗々でもある程度書いてから 2021 年 3 月に帰りたいものだが、やはり無理は禁物。キホーテ的無謀さやピカレスクの偽悪趣味はこの際無縁と独りごちつつ、外出の都度せっせと殺菌効果の高い石鹸で肘まで洗い、洗口液でうがいに余念がない。夏なのに肌荒れで困ってしまう。

(かとう・しんご 慶應義塾大学専任講師、コンプルテンセ大学情報科学部客員研究員、マドリー自治大学現代史学科博士課程)

【エッセイ 3】

コロナ禍と遠隔授業

小川 雅美

2020年3月11日、WHOは新型コロナウイルス感染症（COVID-19）について事実上のパンデミック宣言を行った。日本においても客船内および全国各地で感染者が増えていた。そして、スペインで同感染症が猛威をふるっていた3月末頃、日本の各大学は新学期への対応を発表した。筆者は6つの大学で非常勤講師として勤務しているが、うち2大学がカレンダー通りに授業を開始し、その後大型連休明けまでに全ての大学が開講した。しかし、それは、前代未聞の全面的な遠隔授業（オンライン授業）であった。

そのような中、TADESKA（関西スペイン語教授法ワークショップ）は、web会議システムZoomを利用して例会を行うことを決めた。4月から6月まで計3回、それぞれ20名前後が集った。今年度初めて教える大学院生から大ベテランまで、また、関西や名古屋のみならず関東から山陰、九州、そしてマレーシアからの参加者を迎え、活発に話し合った。4月は、今学期の授業で利用される可能性の高まっていたZoomの使用実験を行った。参加者が教員役や学生役となり、模擬授業を行ったり気になる機能を試し合ったりした。次に、ほぼ全ての大学で遠隔授業が始まった5月は、参加者が困り事を述べ、話し合いを通して問題の整理と解決もしくは軽減をはかった。そして6月は、成績評価および各自が実践中の様々な授業の方法について情報交換を行った。

大学が備えているLMS（学習管理システム）や外部サービス（Zoom, Microsoft 365, Google等）の利用、主軸となる授業方法（同時双方向、オンデマンド動画、オンデマンド資料）、評価方法（オンラインでのテストや課題等）は、教員間の話し合いによってある程度類別できる。一方、それらが具体的にどのように用いられるかは、個々の教員に特有のものとなる。そのため、ノウハウを共有し、共感できることは多くあるが、実践は画一的たりえないし、単純な類別もできない。実際、私自身の授業についての学生らのコメントも多様であることから、授業方法は多様であるべきであるとの感を強くした。TADESKAのZoom例会で行った実験や情報交換、意見交換により、今日明日にも必要なテクニックを互いに得ること、多様な教え方に接することで自分の教え方を相対化すること、そして、普段は孤軍奮闘しているスペイン語教員が状況の垣根を越えて話し合い、ほっとすること、これらがタイミングよくできたのではないだろうか。

今年度前半、私は次々と迫り来る授業の準備に追われ、ZoomやTeamsを立ち上げては学生たちと動詞の活用練習や音読練習を行い、学生らからの連絡に対応し、その一方で雪だるま式に増える未採点の課題の量におののく日々であった（自分が課したものなので自業自得である）。このような状況では、不備も出るし失敗もする。それに、TADESKAの参加者の発言にもあったように、自分が作成した教材を学生たちが本当に利用しているのか、利用しなくてもやり過ごしてしまうのではないかと、という危惧もある。このようなストレスのもとで、なんとかコースを完走できた理由のうちこの場で特筆すべきことは次の3点であろう。まず、授業準備は、初級文法の説明であっても一種の創作活動であった。私の場合は、スライド形式の資料を授業の中心とした。「教科書やこの資料を読みながら学生たちは何を考えるだろうか」と想像しながら資料を作成するのは張り合いがあった。次に、統括している専任の先生方（複数の大学）が、どんなに忙しくストレスの多い仕事を抱えていても、常に余裕を持っ

て接して下さったことである。メールの文面にやさしさと柔軟性が感じられた。よって自分の非力を反省しつつも気持ちは前向きでいられた。また、職員の方々が、おそらく不眠不休でお仕事をされていた中でも落ち着いてきめ細やかな対応をしてくださっていたことも忘れられない。最後に、学生達の遠隔授業出席率が極めて高く、多くの学生たちは同時双方向授業でいつも元気に声を出し、真面目に課題をこなし、率直な意見を述べてくれていたことを挙げずにはいられない。遠隔授業は暗闇で手探りするようなものであったので、暖かい心に触れ、共鳴を感じることで、トンネルの奥の光に向かうことができたのだと思う。

しかしながら、楽観視はできない。おそらくほとんどの大学、特に外国語の授業は、今年度後半も遠隔授業で行われるであろう。教員も学生も慣れてきてはいるだろうが、学校関係者やその家族の生命や健康を優先することの代償として、学生たち、特に1年生が期待していた学生生活が送れないことが常に気がかりである。また、いかにICTを駆使しても、試験監督のない試験に基づく学力測定や成績評価からは疑わしさがぬぐえない。さらに、スペイン語圏のいくつもの国々が今や主要な感染国となっており、これらの国々でも日本でも、コロナ禍がもたらす経済社会的な影響は深刻な懸念材料である。外国語の学習は楽しいこともあれば苦しいこともある。その努力はすぐには報われにくい。苦しい時、学生たちはどのような希望を持てばよいのだろうか。教員として私たちはどうすればよいのだろうか。どのようなコースを切り拓くべきだろうか。共に考えるテーマはまだきっとあるだろう。今年度後半はすぐに始まる。

(おがわ・まさみ TADESKA 世話役、京都大学等非常勤講師)

【書評 1】

三好準之助『南北アメリカ・スペイン語辞典』

(大学書林、2020年)

福嶋 教隆

本書は、ラテンアメリカ及びアメリカ合衆国で用いられるスペイン語の語法(americanismos)を扱った西和辞典で、見出し語約37,000、A5判2172ページの大著である。その特徴として、第1に、必要に応じてスペインのスペイン語とamericanismosの違いを明らかにしていることがあげられる。

americanismos については、これまでに Renaud Richard 編 (1997) *Diccionario de hispanoamericanismos*, Madrid: Cátedra や Asociación de Academias de la Lengua Española [ASALE] (2010) *Diccionario de americanismos*, Lima: Santillana Ediciones Generales をはじめ多くの西々辞典が刊行されている。しかしこれらには、見出し語がスペインではどういう意味を表すかは記されていない。例えば chocolate は、ASALE (2010) では、語源が示された後、直ちに「1. adj. Mx. Ilegal. pop. / 2. m. Ec. Ch. Ur. Sangre, especialmente la que fluye por hemorragia nasal. pop. / 3. m. Bo. En el ejército, ejercicio físico de castigo que consiste en flexionar repetidamente las piernas manteniendo recto el cuerpo.」といったラテンアメリカ各地でのみ用いられる語法についての説明が続く。

一方、三好 (2020) では、まず「男「チョコレート」. ①メキ. スペイン語圏の共通語. ②語形成 (先住民語系語). 同義のナワ語 chocolatl から」という記述で、語源とともに、スペイ

ンを含むスペイン語圏全域での標準的な語義を示す。その上で、以下のように *americanismo* としての語釈を提示する。「③「米 (= *americanismo*、福寫注) の異義「ココア」(メキ. スペイン語圏の共通語). 「(殴られたりして出る) 鼻血 (ペル, チリ). cf. *ahorrar el chocolate del loro* 「ピントはずれの節約をする」(チリ); *chocolate de harina* 「トウモロコシ粉入りココア」(コロ); ¡*chocolate por la noticia!* 「(間投詞) (新事実として知らされた内容がもうわかっている場合に口にする) もう知ってるよ!」(ウル, アル); *hacer saltar el chocolate a ~* 「~を殴って鼻血を出させる」(アル); *sacar a ~ el chocolate* 「~を殴って出血させる」(メキ, アル).」。

既存の辞書では、当該の語がスペインではどのような意味を表すかは、スペイン人にとっては自明だとして省略されて、有標の語義のみが扱われるが、三好 (2020) では日本語を母語とする利用者の立場に立って、紙幅を割いて広い視野からの記述がなされているわけである。

本書の第 2 の特徴は、名詞や動詞のように具体的な指示対象を持ち、意味の地域差が容易に意識される語は無論のこと、機能語やそれに準ずる語の微妙な地域的用法にも十分な目配りができている点である。例えばラプラタ地域のスペイン語では、*mismo* が次のように *claro que* や *por supuesto* のような意味で使われる。—*Entonces nos reunimos mañana. —Mismo nos reunimos.* (Bosque, Ignacio 他・編 (2018) *Palabras en lluvia minuciosa*, Madrid: Iberoamericana / Frankfurt am Main: Vervuert, p. 104) だが従来の *americanismos* の辞書の多くには *mismo* の項目自体が存在しない。Richard 編 (1997) と ASALE (2010) には *mismo* という項目はあるが、この用法は収録されていない。一方、三好 (2010) は *mismo*¹ と *mismo*² という項目を設け、前者に次のような説明を与えている。「*mismo*¹ 副「(相手の言ったことに対して) その通り, おっしゃるとおり (です)」。①ウル. ②語義変化. 西 (= *español europeo*、福寫注) の異義「まさに, ちょうど」から. ③米の変異形 *mesmo* (ウル).」。的確な語釈に加え、なぜそのような語義が生まれたのかという疑問にも答えてくれる記述である。

ASALE (2010) は、そのデジタル版の改訂新版の企画が出たところだが、基本的な編集方針に変更はないと思われるので、その完成後も、三好 (2020) の独自性、価値は失われることがない。三好 (2020) は日本語話者のための *americanismos* の優れた辞書であり、その貢献は計り知れない。日本の *hispanismo* をこのような高みに至らしめた編者に心からの賞賛を送り、この辞書が広く活用されることを祈りたい。

(ふくしま・のりたか 神戸市外国語大学名誉教授)

【書評 2】

バレリア・ルイセリ『俺の歯の話』(松本健二訳、白水社、2019年)

岡本 淳子

1983 年生まれのメキシコ人作家バレリア・ルイセリの『俺の歯の話』は不思議な作品である。一人称で語られる「第一の書」に、「こいつは俺の歯と、俺のコレクションやモノの変わりやすい価値についての話だ」とある。「ハイウェイ」という愛称を持つ主人公は自らの人生を語る際にやたらと歯に言及する。4本の魔歯(乳児先天性歯)を生やして誕生した主人公を父親が看護婦に突き返そうとしたこと、無職の父親にはラジオを聴きながら手の指の爪を歯で噛み切る癖があったこと、8歳の時に乳歯はすべて抜け、生えてきた永久歯は「シャベルミ

たいに幅広で、どれもてんでばらばらの方を向いていた」こと、ジュース工場で警備員として19年勤めあげたが、その間ひどい虫歯の歯根管治療のため3日間休んだことなどである。他人の描写をする際にも主人公は歯に注目する。8歳の時に仕事をしていた新聞スタンドのオーナー、ルベン・ダリーオは妻の浮気が心配でハイウェイに妻の様子を見に行かせていた。案の定、浮気の真っ最中であつた妻は「どきまぎするほど長くて先の丸い犬歯を剥き出しにして、腹の底から笑い声を上げた」。夫の留守に男を家に入れて浮気する肉食系の女性を、その歯の描写によって表し得ているところが見事である。ハイウェイの昇進について工場長は「長年の歯医者通いに特有のやや不気味な笑みを浮かべて」伝える。それっていったいどんな笑い？とつっこみたくもなるが、なんとなく納得してしまうのが不思議だ。ハイウェイのおじボードリヤールの「アメリカ人にはアイデンティティがないかもしれないが、素晴らしい歯をしている」という言葉にも説得力がある。アメリカ人のほとんどが幼少期に歯の矯正をしており、彼らの歯並びに対する執着には並々ならぬものがある。作者レイセリは歯に関係した描写を様々なところに注意深く散りばめている。

主人公の歯にまつわる物語はその後大きく展開する。ハイウェイの後任の警備員が競売人になって相当稼いでいるという話を親友エル・ペロから聞き、ある地元の作家が小説を一冊書いて成功し、歯をすべて入れ替えたという新聞記事を読んだことで、ハイウェイの一大転機が訪れる。競売人になって歯を治すという確固たる目標を定めた彼は、近所の短期集中入門講座で競売術を学び、その後アメリカで6か月の上級コースを修了する。競売人となり、「マイアミにマンションが十軒買えるほど稼いでいた」ハイウェイはある日、密売遺品のオークションでマリリン・モンローの歯を落札し、その歯をすべて移植してもらうのである。予想もしない展開に度肝を抜かれながらも、なぜかすんなりと入ってくる物語。いったい何がそうさせるのだろうか。

第一の書「物語」が終わると、第二の書から第六の書までには「誇張法」「比喻法」「循環論法」「寓意法」「省略法」というタイトルがついている。どんな難しい話になっていくのかと身構えて読みだすと、「物語」と変わらぬトーンで一人称の語りが続くため、なぜかホッとする。第二の書でハイウェイは、聖アポロニア教会の財政難を解決すべく、老人ホームで暮らす裕福な年寄りたちにオークションを開催するよう司祭から頼まれる。出品するのは歯のコレクションであり、それぞれの歯に関するハイウェイの説明はすべて嘘である。いや、彼の言葉を借りれば「嘘」ではない。「俺がその品について語る物語はすべて事実に基づいているが、その事実は時として誇張されている」、「歯のひとつひとつに俺のお気に入りの人物に関する誇張した真実の物語をかぶせていけばいい」という考えのもと、ハイウェイは競売を始め、その話術を披露していく。気の毒なご老人たちはハイウェイの口車に乗せられ、実際には何の価値もない歯を高値で落札していく。彼らが価値を見出しているのは歯そのものではなく、その歯にまつわる物語のほうなのである。モノの価値が変わりやすいのは、そのモノに与する物語が変われば価値も変わるからだ。本書を読む我々はその物語世界に引き込まれていくのも、荒唐無稽で不条理な設定でありながら、そこに真実の物語、あるいは真理を見出しているからではないだろうか。

個人的には第五の書「寓意法」が好きである。盗んだ作品でオークションを開くことにしたハイウェイが考える各作品の説明が、それ自体でショートショートとして面白く読める。コルタサルスの匂いのする作品もあるように思うのだが、門外漢が的外れなことを言っていたらご海容のほどを。第六の書「省略法」は、語り手が変わり、これまでのハイウェイの語り

で語られなかった事実が明らかになり、読者はびっくりする。そしてこの第六の書で使われている数枚の場所や建物の写真が実際のところ何であるのかは、作者あとがきで明かされる。読者はまたまたびっくりする。あまり多くを書いて、これから読む方の楽しみを奪ってはいけない。とにかく一度読んでみてほしい。最後に年表が付いているのだが補足資料という扱いではなく、第七の書「年表」とある。最後の最後までフィクションと現実の世界をフアジューな状態で漂う感覚を味わえる。

(おかもと・じゅんこ 大阪大学大学院准教授)

【書評3】

泉水浩隆『Un estudio fonético experimental sobre la percepción de la entonación de oraciones declarativas e interrogativas del español por hablantes nativos y estudiantes japoneses

スペイン語母語話者と日本人スペイン語学習者の平叙文・疑問文イントネーションの知覚に関する実験音声学的研究』

(三修社、2020年)

高澤 美由紀

本書は、南山大学外国語学部スペイン・ラテンアメリカ学科教授である泉水浩隆氏が2014年度に上智大学大学院言語学専攻に提出した博士論文に加筆修正をし、南山大学学術叢書の一冊として2020年に出版されたスペイン語で執筆された著作である。尚、タイトルの邦題は、泉水氏自身によるものである。

本書は、実験音声学の手法を用い、スペイン語母語話者と日本人スペイン語学習者がどのように平叙文と疑問文のイントネーションをそれぞれ知覚するのかについて、その相違点と類似点について、収集したデータに基づいて詳細に観察、分析した結果を報告する唯一の出版された専門書である。さらに、特筆すべきはスペイン語教育の分野についての言及がある点であり、今後のスペイン語教育への寄与が期待されるものである。

7章からなる本書は、第1章でまずスペイン語を対象とした20世紀初期からの音韻・音声学分野の発展について概観し、今日に至る情報科学の進歩に伴う音声分析や音声合成の飛躍的進歩について触れる一方で、言語学の他分野と比較してこの分野、特に日本人スペイン語学習者を対象としたイントネーションの知覚に関する研究が十分には行われていないままであることに言及し、本書の目的を明確にしている。

第2章は、英語やスペイン語を含むヨーロッパ言語を対象としたイントネーションの記述法等、近年の傾向がまとめられ、さらに、スペイン語教育の分野に関する近年の研究についての言及もあり、スペイン語音声学、特にプロソディ分野の入門書がほぼない日本の現状において、その概観をおさえるために有用であると考えられる。

第3章から第6章は、スペイン語母語話者と日本人スペイン語学習者の平叙文と疑問文のイントネーションの知覚についての実験とその結果についてである。第3章と第4章で実施されたパイロット実験に基づき、第5章と第6章では量的研究を実施している。スペイン語母語話者と日本人スペイン語学習者には3つのタイプの同じ刺激音（スペイン語母語話者によって発話された平叙文、上昇調の疑問文、下降調の疑問文、句末としてそれぞれ実現された発話を基にした、①語彙、およびプロソディ情報を保持した加工処理を施していない音声、②プロソディ情報のみを残して加工した音声、③文頭、文中、文末の一か所を白色雑音で消

した音声) が提示され、どのように知覚されるかについての聴取実験を実施している。スペイン語母語話者と日本人スペイン語学習者の知覚の相違点と類似点がどの情報に起因するのかを明確にするために、刺激音は 3 つのタイプに分けられているが、量的研究とするだけの人数のインフォーマントを対象とし、このような聴取実験を行うことの困難さは想像に難くない。

第 7 章は、まとめとスペイン語の音声教育への応用を目的とする今後の課題を述べ、結びとしている。筆者も触れているように、外国語の学習において母語の干渉は注目すべき点であり、また、周知のとおり、スペイン語においては平叙文と疑問文の弁別機能を果たすイントネーションの役割は重要であり、スペイン語音声教育への応用の提示へと発展していきであろう著者の今後の研究が待ち遠しい。本書は、これから修論等を執筆する学生にとって、実験計画を立てる上で学ぶべき点が多い著作である。

最後に、内容とは関係ないが、著者が「気球が上下することはイントネーションにおける音の上下のメタファーのようにも思える」と言及する気球に限らず、「出発」というタイトルの絵が使用された本書の表紙は、著者の今後の研究への姿勢も表されているような印象的なものであり、ぜひ一度ご覧いただきたい。

(たかさわ・みゆき 亜細亜大学准教授)

【書評 4】

田尻陽一編 『21 世紀のスペイン演劇 1』
(田尻陽一・岡本淳子・矢野明紘訳、水声社、2019 年)

小阪 知弘

田尻陽一氏が編者を務めたスペイン現代演劇のアンソロジーである『21 世紀のスペイン演劇 1』が 2019 年 10 月に上梓された。この作品集は、同じく田尻陽一氏が監修を務めた『現代演劇選集 I』(カモミール社、2014 年)、『現代スペイン演劇選集 II』(同、2015 年)、『現代スペイン演劇選集 III』(同、2016 年) に続く現代スペイン演劇をめぐるアンソロジーである。同アンソロジーの特徴は、タイトルが示しているように、「21 世紀のスペイン演劇」に特化して訳出された作品集であることである。同作品集には、スペイン人劇作家 6 名と、スペイン在住のウルグアイ人劇作家 1 名、合計 7 名の劇作家による 7 作品が収録されている。

アンソロジーの最初を飾るファン・カルロス・ルビオによる戯曲、『風に傷つけられて』(改訂最終版 2014 年) は、父を亡くした息子ダビッが、かつてその父に恋し文通していたファンという男と語り合うという二者の対話劇として成り立っている傑作である。「父」、「妹」、「ネコ」などの喪失をめぐる対話が進展していくなか、作品世界の最終局面でファンは風について語り始める。「わたしはいつも風の音を聞くのが好きだ。風の道を吹き抜ける風。風は人を傷つけない。そう思っていた。風は君を傷つけないものだ……。」(p. 36) そして、ファンは次のように言う。「そして風に傷つけられた……。」(p. 36) 作品世界内において風は多義的な意味を内包するシンボルとして作用し、最終的に風は 2 人の男を傷つけながら喪失、孤独、悲しみ、苦悩、実存の不安、それら全てを浄化させるのである。2 番目に収録されているブランカ・ドメネクによる戯曲、『さすらう人々』(2009 年) では、登場人物のひとりであるオリベルが次のように言う。「僕たちは探す。痕跡を……。でも自分が探していると思っ

のをいつも探しているとは限らない。」(p. 78) このように、同作品では、高度文明社会の中で自分を見失い、「自分探しの旅」を続けている現代人の姿が浮き彫りにされている。

3 番目に収録されているホセ・マヌエル・モラの作品、『わが心、ここにあらず』(2009 年)では、「少女」、「犬」そして「黄昏」の 3 要素が作品世界を動かしていき、最終場面では 2 つの舞台が同時進行していくことになる。幕切れ直前において年配の男はクラシック音楽を聴くことが好きな老犬、モーツァルトに以下のように話しかける。「わしらがなくなったとしても、美しいものは残る、いいか、モーツァルト。」(p. 128) 「生きているものすべてに、お前も含めて、モーツァルト、美しいことが起こるかもしれない。」(p. 128) 詩的な台詞が煌めく美しい作品である。

4 番目のアンヘリカ・リデルによる戯曲、『地上に広がる大空』(2013 年)は、テロリズムと人肉食いが扱われた衝撃的な作品である。5 番目に収録されているアルベルト・コネヘロによる戯曲、『暗い石』(2016 年)では、フェデリコ・ガルシア・ロルカ(1898 年～1936 年)の最後の恋人であったラファエル・ロドリゲス・ラプン(1912 年～1937 年)の死をフィクションとして立ち上げた野心的な作品である。この作品の題名がロルカの『暗い愛のソネット』(1936 年)に着想を得ていることは容易に推察できる。

6 番目のアントニオ・ロハノによる戯曲、『怒りのスカンディナヴィア』(2016 年)は、テキストの随所にマルセル・ブルースト(1871 年～1922 年)の『失われた時を求めて』(1913 年～1927 年)の言説が組み込まれた、記憶をめぐる物語である。チャットやフェイスブックなど現代の SNS 世界もちりばめられた良作である。アンソロジーの最後を締めくくるのはウルグアイ出身のデニセ・デスペイロウによる戯曲、『渦巻星雲の劇的起源』(2016 年)である。同作品はパソコン、携帯、iPad などの情報端末やスカイプなどの SNS が浸透した日常生活において、人間が「生きる」ことの意味を問いながら、「時間のずれ」やアンドロメダ星雲の誕生を扱った宇宙的な広がりを含む秀作である。

このように『21 世紀のスペイン演劇 1』は多様な 7 作品から成り立っており、非常に読み応えのあるアンソロジーである。また、日本語による舞台化も想定された良心的な作品集である。私事になるが、先述した『現代スペイン演劇選集 III』に収録されているホセ・ラモン・フェルナンデスによる短編戯曲、『水の記憶』を、田尻陽一氏の承諾を得て、勤務している南山大学スペイン・ラテンアメリカ学科の学科行事の一環を成すスペイン語劇の催しにおいて、2018 年 12 月に上演させていただき、大変好評を得たことがある。このように、田尻陽一氏による一連の現代スペイン演劇をめぐるアンソロジーは実際の舞台化にも一役買っているのである。

目下、田尻陽一氏は『21 世紀のスペイン演劇 2』の刊行準備を進めており、既に 6 作品を選定し、訳出作業を進めているという。同アンソロジー第 2 巻の出版が今から楽しみである。

(こさか・ともひろ 南山大学准教授)

【書評 5】

田林洋一 『ドン・キホーテ』に潜む狂気 ―正気を失ってしまったのは誰か』
(水声社、2020年)

松田 侑子

我々は、著者の田林洋一氏が言語学の研究者だということに驚くことになるだろう。氏は、西洋文学や西洋哲学に造詣が深く、若者を惹きつけるキーワードを散りばめられる、「令和の」感覚をも持ち合わせている。言語学を専門とする田林氏のような方が『ドン・キホーテ』を研究し、本にまとめたということに驚嘆するが、同時に文学を研究し続けている者として焦りが生じたのも事実だ。

そもそも『ドン・キホーテ』の魅力は何か。田林氏はこのように述べている。

「かくもつまらなく、裏切られたと感じられる書物は『ドン・キホーテ』だけに留まらない。他の古典的文学作品は脇におくとして、『ドン・キホーテ』の魅力は、実は人間の本質に迫る哲学的な問いかけに由来するところが大きい。「人間の本質に迫る哲学的な問いかけ」は、人間が誰しも平等に感じる類のものではない。」(p.14)

ここまで書かれれば、文学者としては是が非でも『ドン・キホーテ』の魅力を見つけずにはいられないだろう。こぞって「哲学的な問いかけ」を探しにいこうではないか。田林氏は、その中で「狂気」に的を絞り、第1章から第4章にわたり、ドン・キホーテの狂気、サンチョ・パンサの狂気、そして主従以外の登場人物の狂気を考察している。特に、主従以外の登場人物の狂気を論じている第3章は非常に興味深い。田林氏は「目の前に精神病患者がいたからといって、正気な人間は彼を治療しようとするだろうか」と我々に問いかける。ドン・キホーテの狂気を治そうとした登場人物たちもまた、狂気に侵されていると言うのだ。「愛情(親切心)」、「退屈」、「悪戯心(悪ふざけ)」といったワードで、田林氏は、「正常」な側に居座ろうとしている司祭ペロ・ペレス、ニコラス親方、サンソン・カラスコや公爵夫妻を軒並み「狂人」の席へと上手く導いてしまうのである。そして氏によれば、登場人物の狂気は「一時的には狂っているけれども一時的に正常な時もある」狂気であり、それが認知言語学的に見れば、図 (figure) と地 (ground) の関係にあたり、狂気と正気は表裏一体なものであるという (p.148)。言語学者ならではの概念装置である。

第5章ではセルバンテス自身の人生観を考察し、ドン・キホーテの狂気は、作者のアイロニーとユーモア、パロディーにより展開されたものだと言われている。セルバンテスの略歴も非常に丁寧に描かれている。第6章から最終章の第9章までは、『ドン・キホーテ』が書かれた時代がどのようなものであったかが詳しく描写されている。ここでも、読者は筆者が言語学者であるということをおぼろげに忘れてしまうだろう。歴史、思想史、哲学史、文学史と様々な面からセルバンテスや『ドン・キホーテ』を「読み」解いている。文学者であれば第9章が興味深いことは確かである。『ハムレット』や『白痴』と言った、永らく『ドン・キホーテ』と対比されてきた作品はもちろん、リョサの『悪い娘の悪戯』といった比較的新しい作品まで出てくるのは驚きである。惜しむらくは、『ドン・キホーテ』と騎士道物語及び挿入話の関連を論じている第8章が読みやすいものの短く感じたことだ。頁数はじゅうぶんあるのだが、興味深く、もう少し著者の論を読みたいと思えばこそ、読み手としては物足りなく感じるかもしれない。

『ドン・キホーテ』を論じるにあたり、牛島信明先生の『ドン・キホーテの旅 ―神に抗う

遍歴の騎士』(中公新書)や『反ドン・キホーテ論、セルバンテスの方法を求めて』(弘文堂)、またサルバドル・デ・マダリアーガの翻訳本、『ドン・キホーテの心理学』を読んでいない研究者は存在しない。評者も、清水憲男先生、本田誠二先生、岩根紈和先生、坂東省次先生、片倉充造先生など、名だたる先生方の出版物を何度も何度も読ませていただいた。少し私事を書くことを許していただきたい。10年ほど前、福嶋教隆先生が私に清水先生のエッセイを読むようにと仰って下さった。私は今でもそのエッセイを読み返すのだが、「文学者だからと言って言語学をおろそかにすることはあってはならないことだ、Hayward Keniston の “*The Syntax of Castilian Prose: The Sixteenth Century*” 未読者は研究者ではない」と厳しく書かれていた。恥ずかしながらその本を聞いたこともなかった私は、図書館に行き、禁帯出のその本を2年ほどで書写した。田林氏も著書で言っているように、言語学を専門にしているからといって文学をおろそかにしている理由にはならない。逆もまたしかりである。田林氏は言語学者なので、この著書の執筆は非常に勇気の要することであっただろう。しかし、少なくとも私は、氏の著書によって新たな知見を得、より体系的な文学を感じることができた。ドン・キホーテ研究が専門でない研究者の執筆した本だと言って、これを遠ざける理由は何もないだろう。

(まつだ・ゆうこ 神戸市外国語大学他非常勤講師)

【著書紹介】

『フェデリコ・ガルシア・ロルカと日本』

(晃洋書房、2020年)

森 直香

本書の出発点は、物語が海や国境、文化やことばを越えてさまざまな場所で読まれるとき、何が起こるのかということであった。ダムロッシュは世界文学を「翻訳であれ原語であれ、発祥文化を超えて流通する文学作品」と定義し、文学作品は発祥言語と文化を越境することで真正さや本質を失うどころか、多くの点で豊かになっていくと主張する(『世界文学とは何か』国書刊行会、2011年)。ボルヘスが『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』で示したように、文学作品は異なるコンテキストに置かれることで新しい意味、価値を獲得するのであり、周辺の文学は中核の文学の支配にただ甘んじているわけではないのである。このような背景を念頭に、本書では、フェデリコ・ガルシア・ロルカの日本における受容を体系的に論じることで、日本の読者がどのような期待を抱いて作品を読み、その解釈の過程でどのような新しい価値を見出し、より豊かな文学へ変化させていったかを考察し、ロルカ作品の世界文学としての価値を指摘することを目指した。具体的には、初期受容期(1950年代)に焦点を当て、日本で出版された書評・劇評・論文などロルカ関連の出版物を参照し、彼の作品が日本へ紹介された経緯、作品受容に影響を及ぼした要素、日本人読者の作品解釈について検討した。

従来の研究はロルカ作品を西洋文学・文化の枠組みの中でとらえるものが大半で、作品受容においても、わずかな例外を除き、西洋世界での受容を論じたものがほとんどであったが、本書では作品を日本の文化や価値観と関連付けて論じることで、文化と国境を超える普遍性、非西洋的な要素、日本文化との共通点などの作品の新たな面や、日本人読者が作品に付した

付加価値を発見することを試みた。その結果、日本人読者は、原始的な世界観、スペイン性、動作や台詞にみられる様式化、詩的要素に特に魅力を感じて作品を読んでいたことが明らかになった。なお、日本人がスペイン的と捉えるものは、ジプシーやアンダルシアの風俗のみでなく、死生観をはじめとする世界観も含まれていた。欧米の研究者の多くは、ロルカの世界観を原始的、前キリスト教的、あるいはギリシア悲劇的であると評し、必ずしもスペイン的とは受け止めておらず、この点は大変興味深いと感じる。

また、ロルカの死の経緯は世界中に大きな衝撃を与え、今も読者の興味を引き続けているが、ロルカ自身の死が事実的パラテキストとして作品受容にどのような影響を与えたかについても検討した。そして、日本人読者の多くは政治性と切り離して作品を理解しようと努めていること、しかしその一方で、ロルカの生涯と作品を結び付けて解釈している読者も少なくなく、さらに、特定の作品をロルカの死を予言しているととらえる読者も存在することが分かった。これはスペインでも多かれ少なかれみられる傾向であるものの、作家の生涯と作品を結びつける読みには賛否両論がある。しかし、確かなのは多くの読者が彼の世界観の源泉を理解したいという気持ちからその生涯に興味を抱き、文学を追求し続けた生きざまに心を動かされているということである。そして、死が作家としてのロルカにある種の神秘性を与え、解釈と結びついて作品に新たな魅力を与えているのは否定できない事実である。

加えて、受容研究を通して当時の日本社会とスペイン社会の状況、両国の関係の変化についても扱うことができた。日本におけるスペイン語教育とスペイン語文学翻訳の歴史をたどり、日本のイスパニスタたちの偉大な業績を再確認していく作業は、楽しく、また、大きな喜びであった。本書を通して、スペイン語とスペイン語圏の文化を日本に根付かせた先人たちの歩みが少しでも伝われば幸いである。

(もり・なおか 静岡県立大学准教授)

【新刊書紹介】

松久玲子編著『国境を越えるラテンアメリカの女性たち
—ジェンダーの視点から見た国際労働移動の諸相—』
(晃洋書房、2019年)

北條 ゆかり

本書は、松久氏が主宰した6年間（2013年～2019年）にわたる研究会の成果に基づいている。今世紀に入って、国籍や居住権、ジェンダーによって分断化された労働市場への組込みとしての国際労働移動がますます世界的に広がっている。そうしたなかで、上記研究会は、米州全体を視野に入れた国際労働移動の実態を解明するために、北米とラテンアメリカ双方の研究者が対話を重ね、互いの研究成果から学び合うことをめざした。幸い、「ラテンアメリカの国際労働移動におけるジェンダー・エスニシティによる国際分業の変容」というテーマで科研費助成研究プロジェクトに採択され、その成果として本書が刊行された。

こうして本書は、法的身分や滞在期間に関わりなく労働を目的とした国際移動を行っている人びとを国際移民と呼び、そのなかでも最も脆弱な状況にある女性移民を考察の中心に据えて、ラテンアメリカ地域における「南」から「北」、及び「南」から「南」への国際労働移動に伴う種々の国際分業体制を検証することで、ジェンダーによる国際分業の再配置化と複

層的なグローバリゼーションの実態を解明することを企図している。さらに、それを通じて、労働のグローバリゼーションにおいてラテンアメリカという地域圏の果たす役割をも探ろうとする。本書のこうした問題関心は次のような国際移民研究の動向にも即している。すなわち、国際移住機関（IOM）によればラテンアメリカの国際移民人口の50.7%（2017年統計）が女性であり、しかも単身で移民する女性の存在が顕在化しているということで、1990年代から移民の女性化に焦点があてられるようになってきているのである。また、本書はインタビューや現地調査に基づく社会学的、文化人類学的手法による学際的な研究であるが、研究会の過程では、移住システム論や移民ネットワーク論、累積的因果関係論といった移民理論を踏まえてジェンダー研究からアプローチした。主としてS.サッセンに依拠しつつ、国際的な労働移動を生産の国際化という多国籍企業の世界的展開との関連で捉え、さらに世界的な生産の国際化がもたらす場としてのグローバル・シティの形成が再生産労働を含むサービス産業に移民労働者を大量に吸収しているとの認識を共有した。

本書は、具体的には、ラテンアメリカから米国及びスペインへの域外移民を取り上げる第I部と、ラテンアメリカの域内移民を取り上げる第II部から構成されている。そして序章では、ラテンアメリカの国際移民研究の動向を展望したうえで、同地域の国際移民の特徴が明らかにされている。すなわち、中米以北からの域外移動の主たる目的地は米国であるが、その景気後退や移民政策の厳格化により新しい目的地としてスペインへの移民が2010年以降次第に増加している。また、南米からの域外移動はスペインがその入口となっている。さらに、一般的特徴として、ラテンアメリカにおける経済危機とそれに伴う構造調整の影響で、域外・域内移動ともに変化が生まれたと同時に、受入れ国側の労働需要を反映し、ジェンダー、階層、エスニシティにより分断化された労働市場への組入れが生起している、と。

第I部では、第1章が、ロサンゼルスにおけるエルサルバドルからの移民女性を対象に行ったインタビュー調査をもとに、さまざまな障害を乗り越えて越境する過程を時系列的に分析し、男性移民の語りとの対比を通して女性移民の動機の特性を明らかにしている。ついで第2章は、ニューヨーク大都市圏で非正規移民の生活改善活動を行うメキシコ女性移民のアクティビズムを調査し、出身地でのトランスナショナルな活動をも展開する過程で、どのように女性たちのエンパワーメントが果たされているのかを考察している。また、第3章は、米国のカーニバル産業で働くメキシコからの短期移民労働者が国際分業システムにおいて果たしている役割を分析し、ジェンダーによる労働市場の配置に目を向けている。さらに第4章は、専門職に就くキューバ移民が移民先であるスペインで向き合うキューバ人としてのアイデンティティの揺らぎを論じている。最後に第5章は、2000年代のスペインにみられた国際労働力移動の構造的変化に鑑み、再生産領域での雇用の女性化に着目し、家事労働分野に従事する南米出身女性の労働状況を分析している。

第II部は、ラテンアメリカの域内移民を取り上げている。第6章ではメキシコへの中米女性移民を軸とした家族統合において、母親として二つの国にまたがる世帯を支える女性移民の抱える葛藤が考察されている。また第7章は、ニカラグアからコスタリカへの移民の女性化の問題を取り上げ、新自由主義経済政策が生む「南」の中の経済格差がさらなる国際分業と厳しい労働環境、労働者の低賃金化を生み出していることを描き出している。さらに第8章は、移民先が多様化するコロンビアにおいて、南部からとくにチリへの出稼ぎが増加しているという移民動向とその要因としての暴力を取り上げている。最後に第9章は、アルゼンチンにおける移民の社会保障政策を周辺国からの移民の事例に即して分析している。

本書の考察を通じて、女性の社会進出がジェンダー構造の変革を進めるのではなく、むしろ女性移民労働者の存在が従来のジェンダー構造を維持し、彼女らが労働力予備軍となることで労働市場の低賃金化を支えている構図はいまだに続いていること、生産労働と再生産労働の両面において、ジェンダーにより分断化された労働市場がさらにエスニシティや移民ステータスにより細分化され、より低賃金で良質の女性労働力を効率的に利用する複層的な国際分業構造が構築されていることが明らかとなった。新自由主義は弱者により大きな負荷をかけ続け格差を助長してきたが、今やパンデミックの深刻な影響がそれを加重している。だからこそ、移民の権利を保障する体制の構築が国際社会で一層問われている。

なお、研究会成果のうち、エスニシティを分析軸としたもの及び米国の移民政策、移民組織をテーマとした5論文が、同志社大学人文紀要『社会科学』第49巻第1号（2019年5月）に特集「ラテンアメリカからアメリカ合衆国への移民とエスニシティ」として公刊されている。本書を補完するものとして参照いただきたい。

(ほうじょう・ゆかり 摂南大学教授)

【学会報告 1】

スペイン語学士院連盟第 16 回大会
(XVI Congreso de la Asociación de Academias de la Lengua Española)
(2019 年 11 月 4～8 日、於セビリア)

福島 教隆

去る 2019 年 11 月、セビリアにおいてスペイン語学士院連盟（略称 ASALE）の第 16 回大会が開催された。

同連盟は世界各地のスペイン語学士院の集合体で、1951 年に創設された。現在は、スペイン王立学士院（Real Academia Española）をはじめ、スペイン語を公用語とする国や地域（ラテンアメリカ 18 か国、赤道ギニア、プエルトリコ）、フィリピン、アメリカ合衆国に設けられた、総計 23 のスペイン語学士院で構成されている。本部はマドリードのスペイン王立学士院内に置かれ、2020 年現在の会長（director）は Santiago Muñoz Machado 氏（スペイン王立学士院院長）、事務局長（secretario general）は Francisco Javier Pérez 氏（ベネズエラ言語学士院 Academia Venezolana de la Lengua 前院長）である。

1951 年にメキシコシティで開催された第 1 回大会以来、原則として 4 年ごとに大会が開かれている。今大会はスペイン王立学士院の後援により、セビリアのカハソル財団（Fundación Cajazol）本部やセビリア旧市庁（Ayuntamiento de Sevilla）などを会場として実施された。日本からは、清水憲男氏および筆者が参加した。

第 1 日（11 月 4 日）は、開会式に続いて、「汎スペイン語文学は存在するか？（¿Existe una literatura panhispánica?）」と題する基調シンポジウムが実施され、ペルー出身の Fernando Iwasaki 氏らが発表した。また『イダルゴとサムライ』の著者 Juan Gil 氏による大航海時代に関する基調講演も行われた。

第 2 日（11 月 5 日）は、スペイン王立学士院との共編『スペイン語辞典（Diccionario de la lengua española）』第 24 版の編集作業の経過報告があり、紙媒体ではなく電子版のみで 2026 年に刊行の予定であることなどが公にされた。またスペインの演劇や映画で活躍する José Luis Gómez

氏が *Cantar de mio Cid* の一部を中世の発音で朗読した。

第3日(11月6日)は最も多彩なプログラムが実施された。まず午前の部では、さまざまな企画の経過報告や新たな提案があった。「スペイン語と人工知能 (Lengua Española e Inteligencia Artificial)」計画、『汎スペイン語法律用語辞典 (*Diccionario panhispánico del español jurídico*)』電子版の無料公開、『汎スペイン語語法辞典 (*Diccionario panhispánico de dudas*)』第2版の刊行、『ラテンアメリカ・スペイン語辞典 (*Diccionario de americanismos*)』第2版の刊行、『スペイン語新文法 (*Nueva gramática de la lengua española*)』第2版の刊行、『汎スペイン語熟語辞典 (*Diccionario fraseológico panhispánico*)』の編纂など、数多くの企画が進行中であることが示された(大半は電子版のみ刊行の予定)。またメキシコ言語学士院 (*Academia Mexicana de la Lengua*) による『ラテンアメリカ・スペイン語通時通域コーパス (*Corpus Diacrónico y Diatópico del Español de América*)』の運用実施などが発表された。

第3日の午後の部では、13の分科会に分かれて66の研究発表があった。その内訳は、語彙論11、文法・音声学・音韻論9、正書法3、文学25、文化6、言語教育8、電子コーパス4である。「文法・音声学・音韻論」第2室では、スペインの Ignacio Bosque 氏の司会のもと、筆者を含めて5人の発表があった。個人的に最も興味深かったのは、コスタリカの Mario Portilla Chaves 氏の「parecer を繫辞動詞に含める『スペイン語新文法』に対する批判 (*Críticas a la inclusión del verbo parecer como copulativo en la Nueva gramática de la lengua española*)」であった。『スペイン語新文法』の当の編集者 Bosque 氏による反論もあり、繫辞動詞をどう捉えるかについての活発な討議が行われた。

第4日(11月7日)は、報道関係者への会見が催され、『スペイン語辞典』現行の第23版の電子版の増補などの活動が報告された。brunch (〔借用語〕朝食と昼食を兼ねた食事)、antitaurino (闘牛反対派〈の〉) など多くの語を見出し語に加えることになった点が注目を集めた(現在、この増補版はすでに公開されている)。

第5日(11月8日)は、スペイン王立学士院が編纂する『古典文学大系 (*Biblioteca Clásica*)』に収められたセルバンテス全集 (*Obras completas de Cervantes*) についての紹介などの後、スペインの Felipe VI 国王、Letizia 王妃夫妻の臨席のもと、閉会式が行われた。式では、国王より「スペイン語学士院連盟は、スペイン語の統一とデジタル時代への対応に多大な寄与をしている」という趣旨のスピーチがあった。

スペイン語学士院連盟は、「同一の系脈、同一の言語、同一の運命 (*Una estirpe, una lengua y un destino*)」という標語が示す規範的姿勢を保ちつつも、さまざまな地域変異を客観視し、また現代の社会の動きや技術の革新が言語にもたらす影響への柔軟な配慮も行っている。国際的ネットワークを生かして精力的に活動する、多様性と統一性の均衡のとれた組織であり、私たち日本のイスパニスタには、その成果の一層の活用と、連盟への協力が求められる。2023年には、COVID-19の波を乗り越えて、次回大会がオンラインではなく通常の形態で盛大に開催されることを念じている。

(ふくしま・のりたか 神戸市外国語大学名誉教授)

【学会報告 2】

京都セルバンテス懇話会第 21 回全国大会（2019 年 7 月 20 日、於静岡県立大学）

安田 圭史

2019 年 7 月 20 日、静岡県立大学で開催された京都セルバンテス懇話会の第 21 回全国大会に発表者のひとりとして出席した。同会は現代表の片倉充造教授（天理大学）によると、1997 年、「スペイン／スペイン語圏の総合的・学際的研究を進め、その文化理解を広げるべく」設立された（『スペイン学』第 22 号、2020 年、p.252）。同会は今回で 21 回目となった全国大会（毎年 6 月か 7 月に全国各地の大学で開催）に加え、関西地区で定期的に研究例会も開いている。また、全国大会での講演や研究発表の内容を中心に収めた『スペイン学』も毎年 1 回、論創社から出版され、全国大会や研究例会と併せて日本における「スペイン／スペイン語圏の総合的・学際的研究」に寄与している。

今回の全国大会では 7 点の研究発表が行われた。テーマは多岐に渡り、歴史や文学から、「スペインにおける日本文化の受容」といった研究まで様々で、日本におけるスペイン語圏研究が進展し、急速に細分化していることを改めて認識させられた。とりわけ、「スペインにおける日本文学受容概観」と題した森直香准教授（静岡県立大学）の発表は示唆に富むものであった。森氏はその中で、スペインにおける日本文学受容が盛んになった理由として、日本語学習者が 2010 年代初期以降に飛躍的に増加したこと、さらにサトリ出版（Satori Ediciones）やクアテルニ社（Quaterni）などの日本文学や東洋文学を専門とする小規模な出版社が登場したことを挙げている。サトリ出版は 2011 年から 2018 年までに 57 冊、クアテルニ社は同時期に 36 冊の日本文学の翻訳書を出版したという。筆者は 2014 年にセビリヤ大学で行われたスペイン日本研究学会第 2 回国際会議（II Congreso Internacional de la Asociación de Estudios Japoneses en España）に発表者のひとりとして参加した経験があるが、その際 4 日間で 80 を超える講演や研究発表が行われ、スペインにおける日本に対しての関心の高さに驚いたことがあった。発表のテーマには、文学はもちろん、映画やテレビゲームなどもあった。加えて森氏は、日本文学への関心が近年スペインで大人気の村上春樹を入り口として高まっている傾向があるとも分析する。村上文学の成功の理由を、「普遍性と日本らしさが共存している点にある」と考察しているところには思わず膝を打った。

また、大木雅志氏（元ガリシア国際研究所研究員）の研究発表（「ガリシアにおける『二重のアイデンティティ』の形成と変化」）では、ガリシアを主としたスペインの地域ナショナリズムが詳細に説明された。大木氏によれば、近年カタルーニャやバスクでは、自らを「スペイン人」としてよりも、「カタルーニャ人」、「バスク人」として認識している人の割合が高いのに対して、ガリシア人は、自らを「スペイン人」としてのみならず、「ガリシア人」と定義している人が多数との結果が出ているという。つまり、カタルーニャやバスクでは、独立国家となることも有力な選択肢のひとつと考える傾向がある一方、ガリシアではスペインという国の中での存続、すなわち現状維持の方向性がより支持されているのである。このことは、独立を標榜する地域によって、その動きに明らかな「温度差」が存在することを意味している。日本ではガリシアを中心にして分析するナショナリズム研究は貴重で、その内容には大いに興味を惹かれた。

大会の締めくくりとして行われた、角田哲康教授（日本大学）の記念講演（「サラマンカから広がるスペイン精神文化 ―ウナムーノと日本―」）では、20 世紀のスペインを代表する哲

学者、ミゲル・デ・ウナムーノ（1864年～1936年）の哲学が日本でどのように受容されたかが論じられた。角田教授の明快な説明とさわやかな弁舌もあり、講演の内容にあつという間に引き込まれた。中でも、ウナムーノが内戦下のスペインで亡くなった時、日本ではスペインの「哲学者」として知られていたホセ・オルテガ・イ・ガセット（1883年～1955年）とは対照的に、『読売新聞』や『朝日新聞』において「作家」としてその訃報が報じられていた事実には驚かされた。これには、1926年に近代社から出版された『世界短篇小説体系（5）』に、ウナムーノの短編小説4作品の翻訳が収録されていたことが関係しているという。また、ウナムーノには雄、雌、両性具有、無性の4種類の哲学的な小鳥を「折り紙」で創作する趣味もあり、日本のメディアでは「折り紙の作家」として紹介されたこともあった。講演を拝聴しながら、筆者には、このようなウナムーノの「多彩な才能」が20世紀前半のスペインで活躍した「知識人」の姿を象徴しているように思われた。筆者が今回の研究発表（「サルバドル・デ・マダリアガ *Espanoles de mi tiempo* におけるスペイン第二共和制の外交活動 —国際連盟との関係を中心に—」）で言及したサルバドル・デ・マダリアガ（1886年～1978年）も、ウナムーノと同様に、自らの専門分野のみならず、政治の世界においても大きな影響を与えた。マダリアガは元来鉄道技師であったが、文学関連の作品も著し、さらに政治家や外交官としても活動し多くの著作を発表した。しかし、こうした代表的な「知識人」のキャリアは内戦の勃発を契機に一変した。ウナムーノは戦中に死亡し、マダリアガは長い亡命生活を強いられ、その後1975年にフランコ将軍の独裁が終わるまでスペインに戻ることはなかった。

こうして風光明媚な夏の静岡での一日は瞬く間に過ぎた。バラエティに富む学際的なテーマの数々を一日で学ぶことができる機会は決して多くなく、また大会後に大学近くの懇親会場で参加者の先生方と交流できたのも有意義な経験となった。本来2020年夏にも第22回全国大会が開かれるはずであったが、新型コロナウイルスの感染拡大により、あえなく不開催となった。今後状況が改善し、近い将来、次回大会に参加できるのを心待ちにしている。

（やすだ・けいし 龍谷大学准教授）

【新刊案内】

2019年6月から2020年5月までのスペイン・ラテンアメリカ関係の新刊書です。遺漏があるかもしれません。ご教示願います。

- 『スペイン語のムードとモダリティ —日本語との対照研究の視点から』福嶋教隆（著）、くろしお出版、2019年6月
- 『世界の書店を旅する』ホルヘ・カリオン（著）、野中邦子（訳）、白水社、2019年6月
- 『アベル・サンチェス（ルリユール叢書）』ミゲル・デ・ウナムーノ（著）、富田広樹（訳）、幻戯書房、2019年6月
- 『案内係ほか（フィクションのエル・ドラード）』フェリスベルト・エルナンデス（著）、浜田和範（訳）、水声社、2019年6月
- 『熱狂と幻滅 コロンビア和平の深層』田村剛（著）、朝日新聞出版、2019年6月
- 『ニューエクスプレスプラス スペイン語《CD付》』福嶋教隆（著）、白水社、2019年7月
- 『チリを知るための60章（エリア・スタディーズ）』細野昭雄、工藤章、桑山幹夫（編著）、明石書店、2019年7月

- 『解きながら増やす スペイン語ボキャブラリー練習帳』佐々木克実（著）、白水社、2019年8月
- 『純真なエレンディラと邪悪な祖母の信じがたくも痛ましい物語：ガルシア=マルケス中短編傑作選』G・ガルシア=マルケス（著）、野谷文昭（訳）、河出書房新社、2019年8月
- 『料理人にできること：美食の聖地サンセバスチャンからの伝言』深谷宏治（著）、柴田書店、2019年8月
- 『ミニマムで学ぶ スペイン語のことわざ』星野弥生（著）、クレス出版、2019年9月
- 『ムンサラット・ロッチとカタルーニャ文学』保崎典子（著）、花伝社、2019年9月
- 『シンコ・エスキーナス街の畏』マリオ・バルガス=リョサ（著）、田村さと子（訳）、河出書房新社、2019年9月
- 『古代アメリカの比較文明論：メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』青山和夫、米延仁志、坂井正人、鈴木紀（編）、京都大学学術出版会、2019年9月
- 『アマディス・デ・ガウラ（上）』ガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボ（著）、岩根圀和（訳）、彩流社、2019年9月
- 『アマディス・デ・ガウラ（下）』ガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボ（著）、岩根圀和（訳）、彩流社、2019年10月
- 『新・スペイン語レッスン 初級』阿由葉恵利子（著）、スリーエーネットワーク、2019年10月
- 『ラブレールとセルバンテス 近代小説の原点』中山眞彦（著）、水声社、2019年10月
- 『辺境の生成 征服=入植運動・封建制・商業』足立孝（著）、名古屋大学出版会、2019年10月
- 『前近代スペインのサンティアゴ巡礼：比較巡礼史序説（流通経済大学社会学部創設30周年叢書）』関哲行（著）、流通経済大学出版会、2019年10月
- 『地域から国民国家を問い直す ースコットランド、カタルーニャ、ウイグル、琉球・沖縄などを事例として』奥野良知（著）、明石書店、2019年10月
- 『ピカソの私生活：創作の秘密』オリヴィエ・ヴィドマイエール・ピカソ（著）、岡村多佳夫（訳）、西村書店、2019年10月
- 『ボリビアの先住民と言語教育 ーあるベシロ語（チキタノ語）教師との出会い（ブックレット《アジアを学ぼう》）』中野隆基（著）、風響社、2019年10月
- 『21世紀のスペイン演劇1』田尻陽一（編）、田尻陽一、岡本淳子、矢野明紘（訳）、水声社、2019年11月
- 『プリンストン大学で文学／政治を語る：バルガス=リョサ特別講義』マリオ・バルガス=リョサ（著）、立林良一（訳）、河出書房新社、2019年11月
- 『くろは おうさま』メネナ・コティン（著）、ロサナ・ファリア（イラスト）、宇野和美（訳）、サウザンブックス社、2019年11月
- 『ラテンアメリカの連帯経済 コモン・グッドの再生をめざして』幡谷則子（著）、ぎょうせい、2019年11月
- 『テキストとしての都市 メキシコ DF』柳原孝敦（著）、東京外国語大学出版会、2019年11月
- 『家康とドン・ロドリゴ』岸本静江（著）、富山房インターナショナル、2019年11月
- 『教皇フランシスコの「いのちの言葉」』森一弘（著）、扶桑社、2019年11月

- 『南部メキシコの内発的発展と NGO 補訂版』 北野収 (著)、勁草書房、2019 年 11 月
- 『スペイン語で味わう宮沢賢治作品集 CD 付』 宮沢賢治 (著)、武藤紀子 (イラスト)、エレナ・ガジェゴ・アンドラダ (訳)、大盛堂書房、2019 年 12 月
- 『旅するこどものスペイン語 マドリッド編』 コンデックス情報研究所 (著)、成美堂出版、2019 年 12 月
- 『物語 カタルーニャの歴史 増補版 一知られざる地中海帝国の興亡 (中公新書)』 田澤耕 (著)、中央公論新社、2019 年 12 月
- 『日々の子どもたち：あるいは 366 篇の世界史』 エドゥアルド・ガレアーノ (著)、久野量一 (訳)、岩波書店、2019 年 12 月
- 『俺の歯の話』 バレリア・ルイセリ (著)、松本健二 (訳)、白水社、2019 年 12 月
- 『ボルヘス伝奇集：迷宮の夢見る虎 (世界を読み解く一冊の本)』 今福龍太 (著)、慶應義塾大学出版会、2019 年 12 月
- 『ラテンアメリカ研究入門：〈抵抗するグローバル・サウス〉のアジェンダ』 松下冽 (著)、法律文化社、2019 年 12 月
- 『国境を越えるラテンアメリカの女性たち ―ジェンダーの視点から見た国際労働移動の諸相― (同志社大学人文科学研究研究所研究叢書 LIV)』 松久玲子 (編著)、晃洋書房、2019 年 12 月
- 『コロンビア商人がみた維新後の日本』 ニコラス・タンコ・アルメロ (著)、寺澤辰麿 (訳)、中央公論新社、2019 年 12 月
- 『南北アメリカ・スペイン語辞典』 三好準之助 (著)、大学書林、2020 年 1 月
- 『アラバスターの壺／女王の瞳 ルゴーンネス幻想短編集 (光文社古典新訳文庫)』 レオポルド・ルゴーンネス (著)、大西亮 (訳)、光文社、2020 年 1 月
- 『エスプランディアン武勲』 ガルシ・ロドリゲス・デ・モンタルボ (著)、岩根罔和 (訳)、彩流社、2020 年 1 月
- 『アルフォンシーナ・ストルニの詩の道程 ―モデルニスモから前衛、アンティソネットの創造へ―』 駒井睦子 (著)、溪水社、2020 年 1 月
- 『パラグアイのおかげの話 南米パラグアイに起こった数々の奇跡と魅力』 佐々木直 (著)、文芸社、2020 年 1 月
- 『『ドン・キホーテ』に潜む狂気 ―正気を失ってしまったのは誰か』 田林洋一 (著)、水声社、2020 年 2 月
- 『ゲルニカ ―無差別爆撃とファシズムのはじまり』 早乙女勝元 (著)、新日本出版社、2020 年 2 月
- 『紙芝居 ドラゴンのバラ (ともだちだいすき)』 宇野和美 (再話)、あべしまこ (脚本)、スズキコージ (絵)、童心社、2020 年 2 月
- 『女であるだけで (新しいマヤの文学)』 ソル・ケー・モオ (著)、吉田栄人 (訳)、国書刊行会、2020 年 2 月
- 『独裁者ティラノ・バンデラス：灼熱の地の小説 (ルリユール叢書)』 バリエ=イン克蘭 (著)、大楠栄三 (訳)、幻戯書房、2020 年 2 月
- 『フェデリコ・ガルシア・ロルカと日本』 森直香 (著)、晃洋書房、2020 年 2 月
- 『時との戦い (フィクションのエル・ドラード)』 アレホ・カルペンティエール (著)、鼓直、寺尾隆吉 (訳)、水声社、2020 年 2 月

- 『宣教と適応 ―グローバル・ミッションの近世―』齋藤晃（編）、名古屋大学出版会、2020年2月
- 『ニャンドゥティの秘密』室澤富美香（著）、開拓社、2020年2月
- 『図説 マヤ文明（ふくろうの本／世界の歴史）』嘉幡茂（著）、河出書房新社、2020年2月
- 『ビジュアル図解 マヤ・アステカ文化事典』アントニオ・アイミ（著）、井上幸孝（日本語版監修）、モドリューク枝（訳）、柊風舎、2020年2月
- 『研究社 レクシコ 新標準スペイン語辞典』上田博人（編）、研究社、2020年3月
- 『Un estudio fonético experimental sobre la percepción de la entonación de oraciones declarativas e interrogativas del español por hablantes nativos y estudiantes japoneses スペイン語母語話者と日本人スペイン語学習者の平叙文・疑問文イントネーションの知覚に関する実験音声学的研究（南山大学学術叢書）』泉水浩隆（著）、三修社、2020年3月
- 『日本文化の通になる スペイン語を話す人々のための日本事典 I』遠西啓太（谷口廣治）（著）、朝日出版社、2020年3月
- 『スペイン通史（シリーズコンパクトヒストリア）』川成洋（著）、丸善出版、2020年3月
- 『スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争』林義勝（著）、彩流社、2020年3月
- 『歴史の中のカタルーニャ：史実化していく「神話」の背景』立石博高（著）、山川出版社、2020年3月
- 『エフィメラル ―スペイン新古典悲劇の研究』富田広樹（著）、論創社、2020年3月
- 『サラ・プジョル・ラッセル詩集 ―肉体の下のフィンセント』サラ・プジョル・ラッセル（著）、イバン・ディアス・サンチョ、鼓宗（訳）、関西大学出版部、2020年3月
- 『100人の作家で知る ラテンアメリカ文学ガイドブック』寺尾隆吉（著）、勉誠出版、2020年3月
- 『21世紀のメキシコ革命 ―オアハカのストリートアーティストがつむぐ物語歌』山越英嗣（著）、春風社、2020年3月
- 『グアタナモ：アメリカ・キューバ関係にささった棘』渡邊優（著）、彩流社、2020年3月
- 『同定の政治、転覆する声 ―アルゼンチンの「失踪者」と日系人』石田智恵（著）、春風社、2020年3月
- 『ルポ つながりの経済を創る ―スペイン発「もうひとつの世界」への道』工藤律子（著）、岩波書店、2020年4月
- 『ガラスの虎たち（小学館文庫）』トニ・ヒル（著）、村岡直子（訳）、小学館、2020年4月
- 『ピカソと人類の美術』大高保二郎、永井隆則（編）、三元社、2020年4月
- 『浮島に生きる：アンデス先住民の移動と「近代」（プリミエ・コレクション）』村川淳（著）、京都大学学術出版会、2020年4月
- 『アルゼンチンのタンゴダンス』高橋政祺（著）、モダン出版、2020年4月
- 『小林太平・江口祐子のアルゼンチンタンゴの踊り方（基礎編）』小林太平、江口祐子（著）、モダン出版、2020年4月
- 『アコーディオン弾きの息子（新潮クレスト・ブックス）』ベルナルド・アチャガ（著）、金子奈美（訳）、新潮社、2020年5月
- 『コロンブスの図書館』エドワード・ウィルソン＝リー（著）、五十嵐加奈子（訳）、柏書房、2020年5月

【『HISPÁNICA』編集委員会より】

『HISPÁNICA』第65号の原稿を募集しています。論文・研究ノート・書評を投稿規定に
守り、2021年3月1日から31日（31日消印有効）の期間内にご投稿ください。

（送付先）日本イスパニヤ学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨 1-24-1-4F

（株）ガリレオ 学会業務情報化センター内

多くの会員からのご投稿をお待ちしております。

【編集後記】

今年に入ってから間もなく、新型コロナウイルス感染症 COVID-19 の感染拡大により、あらゆる
ことが今までどおりに行かなくなり、私たちを取り巻く環境は様変わりしました。大学では
対面授業ができなくなりオンライン授業に。会議は Web 会議システムによるオンライン
会議に。学会の大会は通常開催がままならず、オンライン開催に。懇親会はオンライン飲
み会に…。

そのような中で、今年度「会報」は通常発行を果たせたのは大きな喜びです。しかも、昨
年よりも投稿数は大幅に増え、その内容も、巻頭言に始まり、追悼文、エッセイ、書評、著
書紹介、新刊書紹介、学会報告と多岐にわたり、充実した号になりました。

広報委員会「会報」編集部では、開かれた「会報」作りを目指しています。会員間のコ
ミュニケーションの場が限定される中、今後、「会報」の重要性がますます高まると
思います。

コロナ禍でたとえ学会の会場に足を運ぶことができなくても、「会報」が貴重な情報共有
の場を提供し、会員相互を繋ぐ和やかな場であるとともに、私たちに希望をもたらす存在
であり続けてほしいと切に願っております。

（広報委員長 木越 勉）